K-BALLET

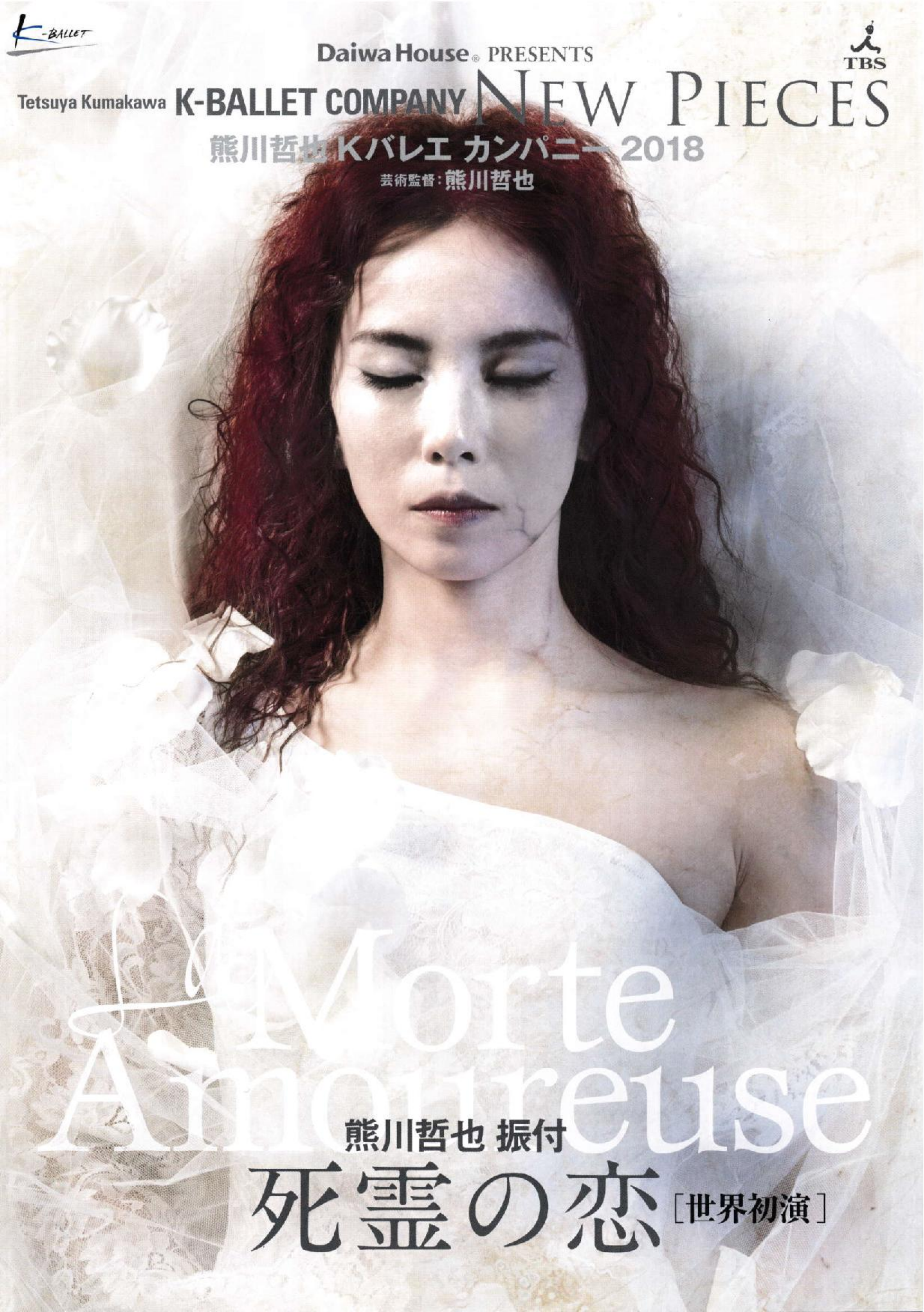
Daiwa House® PRESENTS

TBS

Tetsuya Kumakawa K-BALLET COMPANY NEW PIECES

熊川哲也 Kバレエ カンパニー 2018

芸術監督：熊川哲也



熊川哲也 振付

死霊の恋［世界初演］

19世紀の鬼才ゴーティエ×ピアノの詩人ショパンで はじめ4つの新作で贈る「New Pieces」、いよいよ

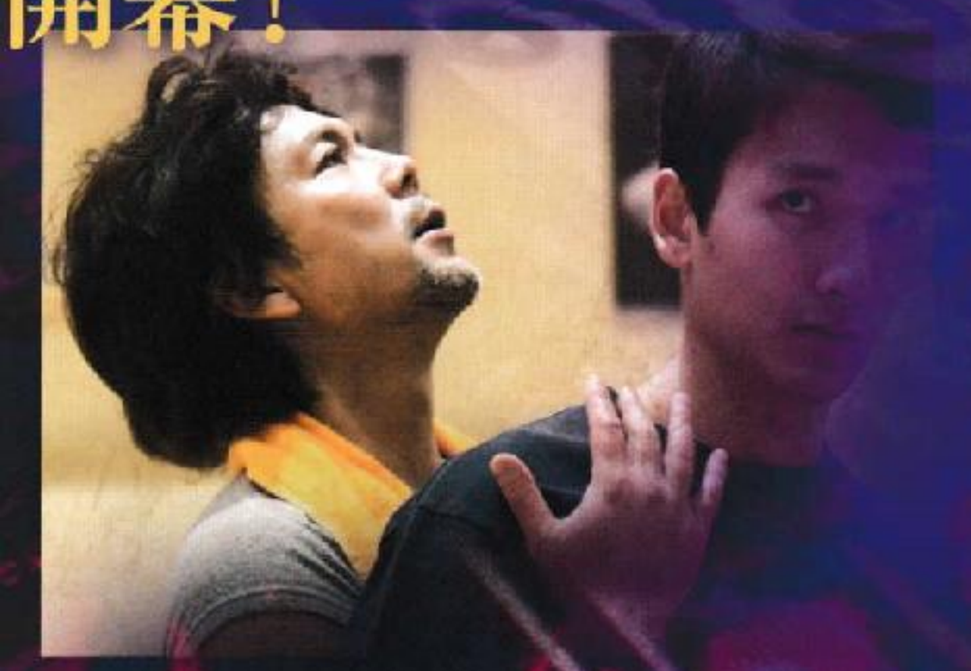
昨年10月に鮮烈な世界初演を果たし、その功績により毎日芸術賞特別賞を受賞するなど
2017年のステージ界最大の話題作となった『クレオパトラ』に続き、熊川哲也が早くも新作発表を表明。
バレエ団独自のレパートリー創出にこだわり、やむことなき稀有な創造性のもと
次々と名作を世に送り出してきたKバレエ カンパニーが、また未知なるバレエ芸術の世界を切り拓く！

芸術監督・熊川哲也が語る

――まずは「New Pieces」と題した本公演の趣旨を聞かせてください。

Kバレエ カンパニー設立からこの18年間、オリジナルの全幕作品や古典全幕の制作に力を注いできた中で、短編に関してはバランシンやアシュトンといった既存の名作を上演することが多かったのです。しかし、バレエの歴史を紐解けば、バレエ・リュスの時代には実に数多くの短編が発表されており、『薔薇の精』や『春の祭典』『ペトルーシュカ』といったその素晴らしい作品は現在も古典として残っています。ところが今の時代、未来に引き継いでいかれるような優れた短編は意外と誕生していない。そうした想いがまずあり、今後は小作品においてもカンパニー独自のレパートリーとして残るものを生み出していきたいと考えました。今回は僕を含めた4名の作品を発表する公演となりますが、一夜にして4つの新作というのはとても魅力的なプログラムだと思います。言うなれば、長編小説を読むのか、短編集を読むのかということ。じつは僕自身は短編集を好んで読みますが、そこには一話終わるごとに「面白かった」と読後感を味わい、また次の物語を読み進めていくという楽しさがあります。バラエティに富んだラインナップを実

紡ぐ熊川哲也最新作『死霊の恋』開幕！



熊川哲也×ダニエル・オストリング（舞台美術・衣装）
2014年『カルメン』、
2017年『クレオパトラ』で絶賛を浴びた
コラボレーションが再び！

「死霊の恋」舞台美術デッサンより

現する今回、カンパニーの財産となり得る作品の誕生を僕自身も期待しています。

――熊川さん振付の新作「死霊の恋」はどのようなものになるのでしょう？

19世紀フランス文学界で優れた才能を発揮したテオフィル・ゴーティエによる同名の短編小説に想を得た作品となります。もともとバランシンの『放蕩息子』やプティの『若者と死』のようなインパクトのある世界を踊ってきていますから、自分でもそうした強い印象を残す短編を手掛けてみたいという気持ちはずっとありました。バレエ・ファンにとってゴーティエは何よりも『ジゼル』の台本作家として知られていますが、実は『クレオパトラ』を創作する際、バレエ・リュスにクレオパトラを題材にしたバレエ『エジプトの夜』があると知って調べると、このゴーティエの『ある夜のクレオパトラ』という短編小説が原作だったのです。自らの命と引き換えにクレオパトラと一夜を過ごす奴隷少年の物語で、バレエ・リュスとゴーティエへのオマージュとしてこのエピソードを僕の『クレオパトラ』の中に組み込みました。その時にさまざまなゴーティエ作品を読み進める中で特に強い印象を刻んだのが『死霊の恋』だったのです。美しき吸血鬼の物語ですが、原作をもとに自身で新たに脚本を作り、ショパンの「ピアノ協奏曲 第1番 第1楽章」に乗せてバレエ作品にふさわしい切なく美しいラブストーリーに仕立て上げます。

――舞台に登場するのは、吸血鬼クラリモンド、彼女と恋に落ちる若き司祭ロミュオー、そしてロミュオーに密かな恋心を抱く先輩聖職者セラピオンという3名のみ。濃密なドラマを誰が踊るのでしょうか。

浅川紫織は今まさに円熟期にあり、何よりその美しさは僕の思い描くクラリモンド像に最適です。また、若く中性的なイメージのあるロミュオーには堀内將平、威厳と演技の巧みさを要するセラピオンには石橋奨也とそれぞれ若手を抜擢しましたが、キャリアや経験を度外視し、作品の世界を作るためのアーティストをキャスティングする、そこにこそ僕の真実があります。両名ともスタジオで非常にハングリーな姿勢を見せてくれていますし、僕と密接な時間を過ごしながら新作を作り上げていく、その未知なる世界へのステップに興奮している様子が日々伝わってきます。舞台美術と衣裳は『クレオパトラ』と同じくダニエル・オストリングに依頼しました。シンプルでありながらも想像力をかき立てる彼ならではの手法は、幻想と現実のあわいにあるような物語において素晴らしい効果を生んでくれるはずです。

――新たに誕生するこの作品を観客にはどのように見てもらいたいと思いますか？

それは観客それぞれの感性に委ねるべきことです。僕は創作する際に、観客の視線を特に意識したことはないですし、自分が面白いと思えるかどうかがすべてですから。ただ、観客を驚かせたいという気持ちはつねにありますね。特に今回は全幕バレエにおける2時間の作品の重みを、20分という凝縮された世界で見せるという点で、自分の中にも可能性の広がりが生まれるのではと感じています。

振付の過程はいつも多くの刺激に満ちあふれていて、美しいムーヴメントが出来上がったり、音楽と得も言われぬ調和が生まれたりと、そういう瞬間はスタジオで至福の時間を感じています。アーティストがドガの踊り子のように見えてくるというのか、美しい絵が生命を帯びて動き出すような、あるいはぼやけていた色彩がはっきりと目に見えてくるような瞬間があるのです。かつて『ベートーヴェン 第九』を振り付けている時、スタジオで陽炎のような空気が漂うなか、ピアニストが奏でる美しい調べのもと浅川紫織が踊っていた光景がまさにそうでした。ああ、バレエは本当に素晴らしいと改めて思える瞬間です。

――熊川さんが選出した3名の作品にも期待が高まります。

振付の才能があるならばどんどん作品を作ったほうがいい。日本ではバレエの振付家が育たないと言われますが、それはこれまで彼らをフィーチャーするマーケットが日本に存在しなかったからであり、育たないと嘆くのではなく、組織は自分たちで育てる環境を作っていかなければならない。Kバレエ カンパニーはそれが実現できる充実した組織があります。今後は優れた作品を、それもできれば日本人の手による作品を一つずつ増やしていき、振付家も作品と共に育っていってほしいという想いがあります。

昨年3月に『Fruits de la passion ～パッションフルーツ』で共作共演した渡辺レイには、徹底的にコンテンポラリーな作品をと依頼しています。キリアンをはじめ20世紀にヨーロッパで花開いた名だたる振付家のもとでキャリアを積んだ彼女の作品を踊ることはダンサーにとって貴重な経験となるはずです。2014年の「オーチャードホール25周年ガラ」でも美的センスのある振付を見せた山本康介には、我が国を代表する名バレリーナである荒井祐子の久々の舞台登場にあたり、名曲「タイスの瞑想曲」で美しいパ・ド・ドゥを振り付けてもらいます。また、カンパニーから選んだ宮尾俊太郎は今回カンパニー公演で振付デビューをさせるにあたり、確固たる形式美のシンフォニック・バレエを作るようオーダーしました。昨年の『クレオパトラ』を経て、さまざまな面でカンパニーの次元が上がったと実感する今、さらに成熟するべく、後世に残る崇高な作品をお見せしたいと考えています。

取材・文：浜野文雄（新書館「ダンスマガジン」編集委員）

「死霊の恋」 Story

若き司祭ロミュオーは亡きクラリモンドが忘れられず、毎日粛々と過ごし、祈りを捧げている。生前、ふたりは想いを寄せ合っていたが、出会った頃すでに聖職者を目指していたロミュオーにとって、高級娼婦であるクラリモンドとの恋は許されざるものであった。

そんなロミュオーのもとを先輩聖職者であるセラピオンが訪れる。ロミュオーに密かな恋心を抱くセラピオンはその想いを打ち明けようとするが、ロミュオーには届かない。

ある夜、うたた寝をしていたロミュオーの部屋に亡くなったはずのクラリモンドが現れる。これが夢か現実かわからず戸惑いながらも愛しい人との再会に喜びを禁じ得ないロミュオー。クラリモンドは自分の世界で永遠に結ばれたいとロミュオーを誘い、彼の血を吸う。その意図を理解したロミュオーは、彼女のためならと身をゆだねる。

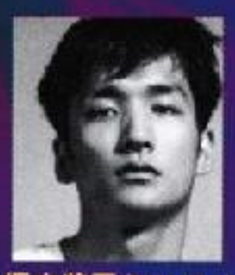
衰弱しているロミュオーの姿を見たセラピオンは介抱するが、この世のものとは思えないほどの憔悴に深い疑念を抱き、十字架をもって退治しようとするも、見えないクラリモンドの力によって妨げられる。残されたふたりの運命は……。

New Piece ①

熊川哲也 振付『死霊の恋』

［音楽］ショパン：「ピアノ協奏曲 第1番 第1楽章」

浅川紫織（クラリモンド）



堀内將平（ロミュオー）

石橋奨也（セラピオン）